

「聖玉の王」シリーズ

# 吟遊詩人の日記2

「王都の光と影」「国王」

立川 みどり

## はじめに

---

「吟遊詩人の日記」は、同人誌にした小説「聖玉の王」と同じ世界設定の連作小説です。本編の「聖玉の王」をお読みになっていなくてもわかる話です。人間と魔族が戦争をしている異世界ですが、「吟遊詩人の日記」では、2巻目まではまだ魔族も戦争も登場しません。

連作集なので、1巻から順に読まなくても話がわかるように作りたと思っています。

そこで、1巻に出した設定やエピソードで、この巻に関係してくるものを説明しておきます。

主人公は羊飼いの息子ですが、吟遊詩人をめざし、王都シグトゥーナの音楽学校で勉強しています。郷里の領主に仕える吟遊詩人ラウズに連れられてシグトゥーナに向かう途中に立ち寄った村で、伯父がその村の過酷な領主に抗議し、領主の姫と駆け落ちして処刑されたことを知ります。伯父と姫の娘ホープは、村人にひそかにかくまわれて育っています。

音楽学校に入学を認められた主人公は、吟遊詩人になるという条件付きの奨学生試験に合格。学生寮に住み、生活費稼ぎのため、都で食用とする羊を一時的に飼育する飼育場で、毎朝登校前にアルバイトをしています。寮のルームメイトは優等生の先輩ウォレスです。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月十八日

作曲の授業のあと、教室でみんなと雑談していたとき、食べ物話題になって、ムグの話が出た。ムグのことは知識として知っていたけど、都に来るまで実物を見たことがなかった。おれの村にはムグを食べる習慣がなくて、飼っている家はなかったしな。大きな村の市場でも見たことがないから、周辺の村にもなかったんだろう。

ムグは、もとは魔界の生き物だったのが、魔族が地上に連れてきたらしい。ネズミぐらいの大きさで、少しネズミに似ているが、毛皮の色はリスみたいな茶色で、腹は白い。しっぽはウサギみたいに太くて短い。

都では、これをよく売っている。生きたのを売っている店も、殺して毛皮をはいだ状態で売っている店もあるし、丸焼きを売っている屋台もある。まだ食べたことはない。なんだか、ネズミに似ていて気持ちが悪くなって……。牛肉とか豚肉とか羊肉とか鳥肉なんかには比べるとずっと安いんだけどね。

そう言ったら、ほかの連中も同じだと言って笑った。ただ、ウォレスと、あとふたりほど、いやそうな顔をして立ち上がり、教室を出ていった。

「どうしたのかな？　なんだか怒っているみたいだったけど」

そう言ったら、「あいつらはいつもムグを食っているからさ」という返事が返ってきた。

聞いてみると、シグトゥーナの貧しい家庭では、ムグを飼ってときどき食用にしている家が多いらしい。おれたちの村ではニワトリかガチョウを飼っている家が多くて、おれの家ではニワトリを飼ってたけど、それと同じなんだろうな。

羊は村の共有財産で、領主様のものでもあるから、いくら羊飼いで勝手に殺して食べるわけにはいかない。それは小麦をつくっている家でも牛飼いの家でも同じだ。でも、自分の家の庭で飼っているニワトリやなんかは自由に食べることができる。シグトゥーナの庶民の家庭でそれにあたるのが、ムグってことらしい。

シグトゥーナでも、広い邸宅に住んでいる貴族やお金持ちは、庭でガチョウやその他のいろんな食用の鳥を飼っているし、中ぐらいに裕福な家庭では、肉は買って食べる。でも、貧しい家庭では、めったに肉を買えないし、かといって、ニワトリなどを飼うような庭もない。だからムグを飼う。ムグは家の中で飼えるし、よく繁殖するんだそうだ。

そういうことなら、ウォレスに悪いことを言ってしまった。さぞ気分を害しただろう。

それにしても、驚いたのは、ほかの連中の言い方にウォレスたちを見下すような響きがあることだ。

「優等生だったって、ムグを食ってるのさ」

そういう言い方して笑うんだ。「よせよ」とたしなめたやつもいたけど、逆に「いい子ちゃん」なんて言われてからかわれてた。

なんだかいやな感じだ。気のいい連中だと思ってたんだけどな。

寮に帰ってからウォレスにあやまろうとしたんだけど、よけい怒らせたみたいだ。二重に彼の

プライドを傷つけてしまったような気がする。

ハウカダル暦三二一年夏至の月二日

このあいだからずっと、ウォレスとは気まずい。悩んでいたら、シグムンドに誕生パーティに出てほしいと誘われた。シグムンドはウォレスを怒らせる原因になったひとりだ。いや、シグムンドが悪いってわけじゃない。おれが考えなしだったんだ。

でも、シグムンドのパーティーにいったら、ウォレスともっと気まずくなるかな……と思ったんだが、シグムンドはウォレスも誘って、ウォレスはそれに応じたいらしい。考えてみれば、ウォレスとシグムンドたちが親しく話しているところを見たことがなかったけど、仲が悪いってわけでもなかったのか？

シグムンドの招待を受けることにして、寮に帰ってからウォレスにその話をふったら、相変わらず機嫌が悪い。

「やつらを快く思っていないのに、しっぽを振るのがおかしいか？」

冷たい口調でそんな言い方をするので驚いた。

「シグムンドと仲が悪かったのか？」

そう聞くと、「べつに」という返事が返ってきた。

「仲がいいわけでもないし、悪いわけでもない。別の世界に住んでる連中ってだけだ」

それって、「仲が悪い」というよりもっと嫌ってるんじゃないか？ いや、嫌っているというより、見下しているような感じだ。

「ほんとうはパーティに行きたくないのか？」

そうたずねたら、ウォレスは「これも勉強だ」と言う。

「宮廷詩人をめざしているんだ。宮廷詩人が無理なら、有力な貴族のお抱え詩人だな。上流階級のパーティに出るのは、その予行演習さ。おまえもそのつもりでいるんだな。単純に誕生祝いにいくつもりでいると後悔するぞ」

どういうことなのかとたずねると、ウォレスはフンと鼻で笑った。

「やつがおれを誕生祝いに呼ぶのは、友だちだと思っているからではなくて、音楽学校の優等生を招いて歌わせたいからさ。余興係ってわけだ。だから、こっちも勉強と仕事と割り切ってる」

そういうことだったのか。

「仕事？」とたずねたら、「料理の包みと手みやげを渡される」という返事が返ってきた。

「おまえに対してはどういうつもりか知らんが、たぶん、おれの場合と同じ理由はあるだろうな。吟遊詩人の奨学生試験に合格したやつなんだから」

ウォレスの態度は相変わらずそっけないが、おれにこれを教えてくれたのは親切なのだと思う。余興係の扱いを受けて、おれがその場でとまどったり腹を立てたりしないよう、教えてくれたんだ。

ハウカダル暦三二一年夏至の月五日

きょうはシグムンドの誕生パーティだった。

シグムンドの家は、ずいぶんりっぱな邸宅だった。郷里の領主様の館よりはだいぶ小さいけれど、それは都にあるからだと思う。大きさは領主様の館より小さくても、領主様の館よりお金をかけているかもしれない。

ウォレスに前もって聞いておいてよかった。シグムンド本人は学友として歓迎してくれているみたいだったけど、おおかたの人は、音楽学校の優等生や奨学生に興味をもっているという感じだった。前もって聞いていなければ、とまどったかもしれない。

シグムンドの母上のソーラ夫人に頼まれて、入学試験のときに歌ったハンナばあさんの歌を歌った。みんながほめてくれて、帽子を差し出すように言った。帽子をひっくり返して出すと、みんながおひねりを入れてくれた。

一同のなかに七つか八つぐらいのかわいい女の子がいて、「どうして帽子にお金を入れるの？」と聞いていた。イーナという名前で、シグムンドの妹だという。

「とても歌がじょうずで、きれいだったでしょう？　そういうときは、帽子にお金を入れるの。おひねりっていうのよ」

ソーラ夫人にそう言われて、気持ちがよかった。

イーナも、豎琴と歌を先生について三年ほど習っているらしくて、子供用の豎琴でそれを披露した。まだ小さいのに、けっこううまかった。この子、才能があるんじゃないかな。

みんなが拍手してほめたら、女の子はうれしそうに自分の頭飾りはずして差し出した。

「おひねりちょうだい」

「まあ。……おまえはもらわなくてもいいの」

母親にたしなめられて、がっかりしているようだったから、さっきもらったおひねりのうち、錫貨を一枚入れた。

「とてもじょうずで、きれいな歌声だったよ」

イーナはうれしそうに「ありがとう」と言ったけど、夫人はそれを取り上げた。

「レディはこういうものをいただかないものなのよ」

イーナは不満そうで、周囲は困惑している。ソーラ夫人の態度にではなく、おれのやったことに驚いたり、困惑したりしているみたいだ。

夫人はこちらに錫貨をさしだした。

「ごめんなさいね。子どものわがままにつきあわせて」

イーナがかわいそうだと思ってためらっていたら、ウォレスがこつんと脇腹をつついてささやいた。

「前もって教えておいただろ。その子は余興係じゃないんだ」

ああ、そうかと、気がついた。彼女は貴族のお姫様で、おれたちは余興係。くれたお金は、余興係への報酬という意味合いがあるんだ。そういう習慣だったんだ。ウォレスに前もって聞いていたのに、気づかなかった。おひねりは純然たる称賛のしるしだと受け取っていたけど、違ったんだ。吟遊詩人におひねりを渡すようなものだったんだ。

前もって聞いていなければ、とまどったかもな。ウォレスがシグムンドを嫌っているのに誕生パーティにやってきたのは、仕事と割り切ったのことだったんだ。

でも、ウォレスは、歌いながら、なんだかいやそうだった。歌はすばらしいし、なんだか迫力もあったんだけど、不本意ながら歌っているという感じがした。上流階級の人々を憎んでいるようにさえ見えた。いや、憎んでいるってのはいいすぎか。反感を感じているってところかな。ウォレスは、ほんとうに上流階級のお抱え楽士になりたいんだろうか？

イーナの音楽の先生という人も、演奏や歌がウォレスと少し似ていた。すばらしくうまくて、でも、聴いている上流階級の人たちに反感をもっているみたいだった。ただ、教え子のイーナに対しては、やさしい目を向けていたけれど。

彼らの反感の理由は、少しわからなくはない。最後にシグムンドが歌って、そのあと雑談になったとき、貴婦人のひとりが、領民たちについて愚痴をこぼして言ったんだ。

「年貢を安くしてほしいと言ってきましたのよ。スープにもう何日も肉を入れていないとか言いますの。で、わたし、言ってやりましたの。わたしも、いつも具の入っていないスープを飲んでますよって。そうしたら、ものすごい目でにらみつけますのよ」

そばで彼女の夫もうなずいて言った。

「まったくだ。農民どもはなまいきでいかん」

驚いたことに、他のお客たちもうなずいている。うなずいていないのは、ウォレスとか、イーナの先生とか、楽士や給仕の人のほかは、ごく数少ない人たちだけだ。

みんな、知らないのだろうか？ 庶民のふつうの夕食はスープとパンで、スープには肉や野菜が入っている。スープに肉の一切れも入れられないというのは、かなり貧しい食事だ。でも、上流階級では、スープと料理を別々に食べる。おれたちも、結婚式とかお祭りみたいな特別なときには、スープは具の少ないあっさりしたのにして、それとはべつに肉を焼いたり蒸したりした料理を食べるけど、上流階級ではそれがふつうの食事らしいと聞いたことがある。

ここにいる人たちって、庶民もスープとは別に料理を食べてるって思ってるんじゃないのかな？ だとしたら、わかってもらえなくて年貢を下げてもらえない村人たちも、無知なばかりに自分の領民たちに憎まれているこの領主夫妻も気の毒だ。

そう思ったんで、おれは思わず口をはさんで説明した。庶民にとっては、パンとスープが食事で、それとは別に肉料理をたべたりはしないんだって。

驚いてくれるかと思った。おれがいとこのホープの村の貧しさを見て、ショックを受けたときみたいに。

でも、みんなは困ったように顔を見合わせただけだった。さっき、イーナにおひねりを渡そうとしたときと同じように、妙な空気が流れている。と、さっき愚痴を言っていた貴婦人は、眉をひそめてこう言った。

「下々の者たちの食事って変わっていますのね。……でも、あなた、そういう言い方は失礼ですわよ。まるで、わたしや夫が領民にひどい扱いをしているみたいではありませんの」

「まったくだ」と、彼女の夫も言う。

「音楽学校で期待されていると聞いたが、礼儀のほうはなっておらんな」

「まあまあ」と、年配の貴婦人が口をはさんだ。さきほど、この夫妻の言葉にうなずいていなかった女性だ。

「その少年は、善意で親切に説明しようとしてくれたのですよ。そのようにいうものではありませんわ。それに、領民にひもじい思いをさせないほうがいいのはほんとうですよ。とくに子どもたちにはね。疫病がはやったときには、飢えている者ほどかかりやすくなるのですよ」

「わたしたち、べつに……」と、先ほどの貴婦人は気まずそうだ。

「領民たちが不満たらたらで文句を言うてくるだけで、飢えさせたりはしておりませんわ」

「そうですか。それならいいのですが」

老貴婦人がため息をついた。相手の言葉を全然信じていないのだが、それ以上は言ってもむだだと思ったようだ。

それから話題が切り替わって、その場の人たちは、領民が飢えているかどうかという問題には、すっかり興味をなくしたようだった。というより、最初から興味はなかったのだろう。

この人たちが悪い人たちというわけではないと思う。残酷な人たちというわけでもないと思う。ただ、感覚がどこか違う。さきほどの老婦人のように、そうじゃない人もいるみたいだけど。でも、おおかたの人たちは、自分が治めている者たちのことを全然わかっていなくて、わかりたくもないみたいだ。ウォレスたちが反感をもつので、上流階級のこういうところなんだろうな。

ハウカダル暦三二一年夏至の月六日

シグムンドの誕生パーティは深夜までつづき、おれたちは用意されていた寢室に泊めてもらった。早朝に起こしてもらって仕事にいったけど、ひどく眠かった。きょう、学校は休みだけど、仕事はあったから。どっちかというと、夏至祭をひかえていつもより忙しいもんな。前の晩に夜ふかしするとわかっていたからといって、休みをとるわけにもいかなかったしな。

仕事はなんとかこなしたけど、やっぱり眠気が尾を引いてぼーっとしてたんだろうな。帰りに市場のそばを通り抜けたとき、財布をすられてしまった。小汚い服装の男の子がぶつかってきて、あやまりもせず走っていったんだが、そのときにやられたらしい。そばにいた野菜売りのおばさんに、「あんた、持ち物はだいじょうぶかい？」と言われて、たしかめたら、財布がなくなってたんだ。

「盗みとかして暮らしている子だよ」と、おばさんが説明してくれた。

「王妃様が、親のない子のめんどうを見る施設をつくったのに、そこに入らずに盗みをして暮らしてる性悪な子がたくさんいるんだ。とくに、あの子。見ただろ？ あのまっ黒の髪」

たしかに、その少年は黒髪だった。珍しいし、噂に魔族が黒髪だってきたことがあるから、思わずぎょっとしたけど、まさか魔族じゃないよな。いくらなんでも、魔族の子どもが都に入り込んだりしたら、とっつかまっているはずだよな。

そう言ったら、おばさんは首をふった。

「あたしもそう思うよ。いくらなんでも、魔族ってことはないよねえとは思っただけだし。耳もとがってないし。でも、あの黒髪とか、性悪さとか、すばしっこさとか。魔族じゃないかねえ」

ともかく、これだけ特徴のある子どもなら、捜せるかもしれない。そう思って、いろんな人に聞いてみたけど、子どもは見つからなかった。ただ、名前がレイヴらしいってことだけはわか

った。

しかたがないので、きょうのところはあきらめ、役所に届けてから寮に帰ってひと眠りした。睡眠不足で頭がすっきりしなかったし。目が覚めてから、もう一回探しに出かけたけど、わからなかった。あの財布には、きのうもらったおひねりがたくさん入ってたのに。くっそ〜。

ハウカダル暦三二一年夏至の月七日

実家に泊まりがけで帰っていたウォレスが戻ってきた。おれがしょげかえっているのに気づいたらしく、どうしたのかとたずねてきたので、財布をすられたことを話した。

「そりゃ、災難だったな。財布が見つかる望みは、まあないと思ったほうがいいだろうな」

ウォレスが同情してくれた。

「盗みをして暮らしてる子が多いとか聞いたけど、どうして王妃様のつくった施設に入らないんだらうな」

そう言ったら、「戦争に行くのがいやなんじゃないか」という返事が返ってきた。

「施設にいれば兵士にならないといけないってわけでもないけど、男だと、兵士以外のものになるのは、まあむずかしいな。施設を出たあと、親も教養もない者がつける仕事は少ないってのもあるけど、兵士は不足していて、国に養われたてまえ、兵士になりたくないなんてとてもいえるような雰囲気じゃないらしい。で、兵士になれば、いちばん使い捨てにされやすいしな」

うーん。そういう理由なら、おとなしく養われていずに、かっぱらいでもしてひとりで生きようというのも、わからなくはないかな。盗みをして暮らしてても、役人につかまったら処罰されるんだから、危険な暮らしには違いないけど、戦争に行くよりはましだろう。

ハウカダル暦三二一年夏至の月八日

きょうは夏至祭だった。街はたいへんな人手だった。村の夏至祭も、酒やごちそうが出たり、みんなで踊ったりしてにぎやかだったけど、都はその比じゃない。

広場に、いつもの十倍ぐらいの店が出ていた。通りを歩いている人も、いつもの十倍ぐらいはいそうだ。王様のおごりだというので、広場に大きなビールの樽がいくつもあった。みんな、それぞれ角製や土器の杯をもって行列に並んでいる。おれも行列に並んでビールをもらい、その場にいた人たちと乾杯した。

楽しかったけど、おとついのことがあったから、財布には気をつけていた。小銭が少ししか入っていないけど、盗られるのはもうごめんだ。

そうしたら、あんのじょう、財布をすりとりとうとする子どもがいた。おとついのレイヴって子とは違う。もっと年下で、よくある栗色の髪で、あの子ほどすばしこくはなかった。

その子の腕をつかまえたら、そばにいただれかが叫んだ。

「いいぞ。にいちゃん。つかまえててくれ。きょうこそ役人に引き渡してやる」

たじろいで、思わず手を離したら、その隙に子どもは逃げ出した。そばにいた人がその子をつかまえようとしたとたん、小石が飛んできて、その人の手にあたった。

石が飛んできた方向を見ると、黒髪の子どもが逃げていくのが見えた。レイヴって子だ、た

ぶん。

あとを追いかけてみようとしたけど、すぐに見失ってしまった。追いかけたとき、広場のはずれの少しさびしいところに出ただけど、そこではじめて気がついた。うす汚れたかっこうをした子どもが何人もいる。祭りに出たいけど、広場に入れば追いはられるので行けない……というふうに見えた。だれもが祭りを楽しめるわけじゃないんだ、この都では。

ハウカダル暦三二一年太陽の月十二日

かあさんとホープからそれぞれ手紙が来た。うちの村からホープたちの村を通してシグトゥーナにくる商人がいて、手紙をあずかってきてくれたんだ。

手紙を届けてくれた商人の話では、商人たちは、うちの村とシグトゥーナを行き来することはけっこう多いけど、ホープの村を通ることはあまりないらしい。村々が貧しすぎて、あまり商売にならないんだそうだ。ホープの村に行く商人は、ほとんどが領主様の館の用らしい。

ってことは、安心して手紙を託せる人はめったにこないということだよな。

それでも、ホープの手紙では、「相変わらずです」というふうに、婉曲な書き方をしている。まんいち領主様やその息のかかった人に見られるとまずいからだろうな。

ホープの村の貧しさを思い出す。で、思うんだが……。ムグのことをホープたちに教えてやれないかな？ たしかホープたちは、庭で鳥やなんかを飼っても税金の対象にされると言っていた。でも、ムグなら家の中で飼えるって聞いたから、こそっと飼って、食糧の足しにできないかな？

ムグを飼うのはむずかしいんだろうか？ どのぐらいの食糧が手に入るんだろう？

ウォレスに聞いてみると、冷たい返事が返ってきた。

「自分が気持ち悪くて食べられないのに、他人には勧めるのか？」

以前のこと、根にもっているみたいだ。

あやまってから、ホープたちのことを話した。もちろん、ホープの身の上は伏せておいたし、どこの村かもいわなかったけど。いとこの住んでいる村がとても貧しくて、しかも領主様が過酷なのだということは話した。

「まだムグを食べたことはないけど、いっぺん食べてみようとは思っているよ。……そのう、丸焼きとかは、形がわかってしまうからちょっと苦手だけど……。スープを売ってるのも見かけたし……」

そう言ったら、ウォレスは「スープ？」と、ふしぎそうな顔をした。

「ムグは、家庭料理ならスープにすることもあるけど、広場で売っているのは丸焼きばかりだろう？」

「いや、広場のだいぶん北にはずれたところで売っているのをときどき見かけるよ。石畳がとぎれて、草ぼうぼうの空き地になっているところがあるだろう？」

「それはひょっとして、貧民窟の入り口じゃないのか」と、ウォレスは目をむいた。

「そうなのか？ 貧しそうな人々をよく見かけると思ったが」

「あきれたやつだ。そんなところで売っているものを食べるんじゃない！ 不潔じゃないか」

ウォレスの言い方に、軽蔑がにじみ出ているので驚いた。ウォレスは貴族や金持ちを軽蔑していると思っていたが、自分たちより貧しい人々も軽蔑しているんだろうか？

「なんで不潔なんだ？」

問い返したら、「ときどき残飯を使っているからだ」という返事が返ってきた。

そ、そうか……。それはたしかに気持ちが悪いな。

「それに、そういうところでは、子どもなんかがつかまえてきた野生のムグを安く買いたたいで使っていることがある。野生のムグは食べないほうがいい。おまえ、以前に、ムグはネズミに似ていて気持ちが悪いと言ってたが、たしかにムグは、魔界原産のくせに、ネズミに似た生き物らしくてな。ネズミの病気がうつることがあるみたいなんだ。だから、食べるのは、食用として家庭で飼っているのかぎったほうがいいんだ」

ネズミの病気……。それは恐いかもしれない。ネズミは恐い病気を運ぶって、聞いたことがある。

「ムグのスープを食べてみたいなら、今度うちに来いよ。ムグの実物も見せてやる。じつは、次の次の休み、おれの誕生祝いをするんだ。学校の友だちを呼べとか言われてたからちょうどいい」

そう言ってくれたので、ありがたくウォレスの申し出を受けることにした。

ハウカダル暦三二一年豆の月十一日

ウォレスの誕生祝いに出かけた。シグムンドのときと違って、家族以外はおれだけという内輪のパーティだった。

「ああ、よかった。この子にちゃんと友だちができたんだねえ」

ウォレスのおかあさんが涙ぐみながらそう言ったので、ちょっとびっくりした。ウォレスって、母親に心配されるほど友だちがいなかったっけ？ まあ、優等生ってのも敬遠されてはいるけど。ウォレス自身、金持ちや貴族の学友とは距離をあげようとするところがあるし……。でも、いいやつなのにな。

「都ははじめてで、わからないことだらけで、ウォレスにいろいろ教えてもらって助かっています」

そう言うと、おかあさんはホホホと笑った。体が弱いとかで、はかなげな印象の人だ。家族はほかに、おにいさん夫妻と妹さんだった。いつも洗濯を頼んでいるおねえさんは、おにいさんの奥さんだ。

ムグはというと、居間を兼ねた食事室の片隅に甕が二つ置いてあって、そこにそれぞれ、おとな数匹と子ども数匹ぐらいつのムグが入っていた。

「あと、にいさんたちの寝室と、かあさんたちの寝室の一つずつムグの甕がある。部屋が狭いから、ここに全部は置けないんだ」

ウォレスがそう言ったので、寝室につづくドアが二つしかない気がついた。おにいさん夫婦で一部屋、おかあさんと妹さんで一部屋ってどこか。ウォレスの部屋がない？ ひょっとして、おにいさんが結婚したので、ウォレスの部屋がなくなった？ 家が貧しいといいながら、ウォレスが寮費のかかる寮にわざわざ入っているのは、それが理由なんだろうか？

疑問に思っていたら、あとで寮に帰ってからウォレスが話してくれた。おれの推測どおりだけど、ウォレスはそれを不満に思っていない。そもそも彼が音楽学校に入学できたのは、おにいさんのおかげらしい。おかあさんが病気になったとき、おにいさんが債務奴隷になって、四年間

鉱山で働いて、おかあさんの薬代を工面したんだけど、ほんとはそれは三年間で足りたんだって。

でも、おにいさんは一年余分にきつい鉱山の仕事をして、お金をつくってから家に戻ってきた。いざというときの蓄えを多少なりともつくるのと、ウォレスを音楽学校にやるために。

「兄貴はよれよれになって戻ってきた。過労で死ぬ人間だって珍しくないようなところなのに。おれのために一年余分に働いたんだ。だから、幸せになって欲しい」

ウォレスがしみじみと語っていた。いいにいさんなんだな。おれ、妹たちにそんな兄貴らしいこと、してやったことなかったな、そういえば。

おっと、かんじんのムグのことを書き忘れてる。

ムグは、魔族と同じで、生まれたときには性別がなくて、生後半年ぐらいで性別が分かれ、卵を産むようになるんだって。卵は、鳥なんかと違って、産み落とした時点で、中にもう胎児みたいなのが入っている。それを食べるちょっとぜいたくな料理もあるけど、ふつうはもったいないからやらないそうだ。

性別は、だいたいオス一匹にメス二匹ぐらいの割合で分化する。オスはほとんど育ちしだいに食べてしまうが、たまに、生まれたのとは別の甕に移して種オスにする。血が濃くなりすぎないように、ムグを買っているほかの家と、若いオスを交換することもある。いま甕にはいっているおとなのムグは、種オスがそれぞれの甕に一匹ずつで、あとはメスだそうだ。メスをたくさん残したほうが効率がいいのは、ニワトリや羊といっしょだな。

メスもおおかたは育てば食べるが、何匹かに一匹、じょうぶそうなのを残しておいて、卵を産ませる。年に3～4回、一回に3～6個ぐらいずつ卵を産む。エサは雑草でいいし、じょうぶだから、飼うのはわりとかんたんらしい。ウォレスんちでは、家族で年に二百匹近くのムグを食べているんだそうだ。

きょうみたいに、ひとり一匹ずつ丸焼きにして食べるのは特別なごちそうで、一匹か、ときには二匹をスープに入れて家族全員で食べるのが、わりとふつうの食事らしい。

うーん、これ一匹を四人で食べるのなら、やっぱり食べ足りないだろうなあ。

もちろん、ほかの動物の肉や魚を市場で買って食べることもあるけど、ムグのおかげで食費がかなり助かっているらしい。

「ムグがなければ、肉を口にするのは何日かに一回とか、でなければスープに肉のきれっばしが浮いているだけみたいな、貧しい食事になるだろうね。よく繁殖してくれるんで助かるよ。狭い家でも飼えるし」

ウォレスはそう言って笑った。

「飼ってればかわいくなって、子どものときなんて、食べるのはいやだと思ったこともあったぜ」とも言ってた。

そうだな。そう言えば、おれも、かわいがっていた羊が肉にされるって聞いて、泣いていやがって、おやじに叱られたことがあったっけ。見てると、けっこうかわいいもんな、ムグって。

ホープたちの村のほうにいく飛脚がいるって聞いたから、ムグを届けてもらうことにした。ムグはウォレスに譲ってもらった。腹に卵をもっているメス二匹と若いオス一匹。三匹はそれぞれ別の甕で飼ってたやつだ。つまり、メス二匹の卵の父親は別のオスだし、いっしょに入れたオスとも別のやつってことになる。これなら、最初が三匹でも、何代かは血が濃くなり過ぎないように繁殖させることができるってわけだ。

ウォレスに聞いた注意書きをつけておいた。小さな壺に入れて送るけど、着いたらもっと広い容器に移すようにとか、子ムグが育って、オスとメスに分化したら、同じメスからうまれたオスとメスを交尾させないように、別の容器に移すようにとか。乳離れしたら親から離してもだいじょうぶだとか、種オスは年をとるまで若いのと取り替えないほうが、血が濃くなり過ぎるのを防げるとかも書いておいた。

ムグが、ホープたちの役に立つといいなあ。ほんとうは、村じゅうにいきわたるほど送ってあげられればいいんだけど。おれにはこれがせいっぱいだ。

ハウカダル暦三二一年同盟の月十三日

ホープからお礼の手紙がきた。いいアイデアかもしれないと書いてあった。どうやら喜んでくれたみたいだ。

メス二匹のうち、一匹は五個の卵を産み、四個が孵化したばかりだそう。もう一匹は三日ほど遅れて四個の卵を産み、まだ孵化していない。両方の卵がかえって、子ムグが乳離れしたら、一匹ずつ組み合わせて、村人に譲るつもりだという。気味悪がる人もいるけど、欲しがった人も何人かいて、あげる順番を決めているという。

とりあえず、食べるより増やすほうを優先するつもりで、子ムグをあげることになっている家も、繁殖させてからさらに別の人に子ムグをまわす……というふうには、すでに取り決めをしているんだそう。

ウォレスにその話をすると、「ずいぶん仲がいい村だなあ」と驚いていた。

そうだなあ。ふつう、食うにも事欠いていけば、自分たちが食べるほうを優先するよなあ。あの村の人たちがそうなのかな？ それとも、ホープの養父母がそういう性格なのかな。血縁でもないホープを育ててくれたぐらいだから。

ハウカダル暦三二一年同盟の月二十一日

きょうとあすは同盟記念日のお祭りだ。お祭りだったって、魔族の侵攻に対応するために十二の王国が同盟を結んだ記念日なのだから、べつにおめでたいものじゃないけどさ。

でも、学校はお休みで、きょうとあすの二日間、広場やあちこちで吟遊詩人たちの歌が聴ける。それがとても楽しみだ。村にも、毎年この日には、少なくともひとりかふたりの吟遊詩人が来ていたけど、都には何十人も吟遊詩人が集まるそうだから。

あちこちみてまわって、何人かの歌を聴いた。いままで聴いたことのない歌もいくつもあった。あしたも聴いてまわるぞ。

ハウカダル暦三二一年同盟の月二十二日

きょうはひどい失敗をした。

吟遊詩人たちの歌を聴いてまわっていたとき、追い払われている子どもたちがいたんで、思わず声をかけたんだ。「まだ学生で、あんまり歌を知らないけど、それでよかったら歌ってあげようか」って。

身なりが貧しいばかりに、吟遊詩人の歌が聴けないなんて、あんまりだと思ったから。ひどいよな。追い払うなんて。吟遊詩人本人じゃなくて、聴いていた聴衆がやったことだけど、詩人は止めなかった。それもちょっとショックだったんだ。

子どもたちについて、以前、夏至祭のときにちょっと踏み込みかけたあたりのもっと奥のほう、たぶんこの子どもたちの住みかと思われるあたりまでいったら、そりゃあひどいもんだった。共同住宅らしい崩れかけの古い建物もあったけど、それはまじなほうだ。

建物と建物とのあいだの隙間に入って、すわりこんでいる者もいた。どうやらそこに住んでいるらしい。完全に崩れた建物の柱と柱のあいだに草で屋根をつくり、壁もドアもない住みかでなんとか雨をしのいでいる者もいる。

これからだんだん寒くなっていくのに、こんな吹きっさらしで凍えないのだろうか。

子どもたちがせがむので、魔族との戦いや同盟について、知っている歌をいくつか歌った。「同盟の誓い」とか、「同盟の日」とか、「ボルド谷の戦い」とか。

歌っているうちに、ほかの子どもたちとかおとなたちも集まって、いつのまにか周囲に人だかりができた。本物の吟遊詩人になったみたいで、ちょっといい気分だった。

聴衆のずっと向こうのほうに、聴いているのかどうかよくわからない風情でたたずんでいる人影があって、以前におれの財布をかつぱらったレイヴとかいう少年じゃないかと思ったけど、きょうはかまわないことにした。どうせ、お金が残っているとは思えないし、この雰囲気をごわしたくなかったから。まわりの聴衆にとっては、たぶんレイヴって子は仲間なんだろうから、つかまえようとしたらこちらに敵意をもつだろう。そんなことにはなりたくなかったし、それに……

。

この人たちのようすをみていたら、もうあれはあきらめようという気にもなってきた。

「あたしたち、おひねりが払えないんだけど」

聴衆のひとりで、おふくろぐらいの年の女性が言った。

「かまいません。おれ、まだ学生で、まだほんものの吟遊詩人にはなっていないんです。だから、ご遠慮なくリクエストしてください。知っている歌なら歌いますよ」

「ほんとかい？」

みんな目を輝かせていろいろリクエストをしてきたので、知っている歌なら歌った。とはいっても、知っている歌は、リクエストされたうちの五曲に一曲ぐらいで、ちょっとなさげなかったけど。

なぜか、リクエストをするのは年配の人ばかり。それもたいていは女性。男たちや子どもたちはじっと聴いているだけだ。

「きみたちは？ 知っている歌なら歌うよ」

子どもたちに声をかけたら、子どもたちは首を横に振り、ひとりが答えた。

「よくわかんない。あまり聴いたことないし。聴こうとしたら、追っばられるし」

「この子どもたちには歌を聴く機会はめったにない」と、年寄りのひとりが口をはさんだ。

「歌を知っているのは、若いころに娼婦やなんかで街中で暮らしていた女たちや、以前はもっとまともな暮らしをしていたこともあったという者たちだけだ」

「歌をつくって」と、子どもたちのひとりが言った。

「吟遊詩人は自分で歌をつくることもあるって、ばあちゃんに聞いたことがある」

それで、おれは即興でなにか歌をつくろうと思った。最初に浮かんだのは、こうやって歌を聴いてもらえる感動と感謝の気持ちをあらわした歌で、本物の吟遊詩人と比べればずいぶん拙いものだったと思うが、みんな喜んでくれた。

そこでやめておけばよかったんだけど……。 「もっと歌をつくって」とせがまれて、つい調子に乗ってしまったんだ。わき起こってきたのは、都にくるとちゅうでみた貧しい村々のようすや、都の貧しい人々をみたときの衝撃。それまで知らなかった現実を知ったときの衝撃……。

それをつい歌ってしまった。周囲の聴衆たちがどう思うかも忘れて。

はっと気がつく、小さな子とかごくわずかな人々がすすり泣き、そのほかの多くの人々は、怒った顔でこちらをにらみついている。彼らの誇りをひどく傷つけたのだと気がついた。

「で？ 豊かな村に育ったあんたは、貧乏なわたしらを哀れんでいるわけだ」

ついさきほどまで喜んで聞いてくれていた女性が、冷たい声で言った。

「違う。おれはそんなつもりじゃ……」

そう言ったとたん、小石が飛んできて頬にあたった。ふり向くと、おれをここに案内してきた子どもたちのひとりが、目に涙をためてこちらをにらみついていた。怒りに満ちた視線や表情より、その涙が心に痛かった。

「違う」と言ったけど、何が違うのか、自信がなくなった。

たしかに、彼らを哀れむつもりも、見下すつもりもなかった。でも、傲慢で考えなしだったのはたしかだ。

みんなが去っていったあと、レイヴって少年だけは、あいかわらず離れた木の下にずっといた。こちらを見ていたから、やりとりは聞いていたのだろう。

でも、とても盗まれた財布のことを蒸し返す気分じゃなくて、そのまますすろ帰ってきた。

ハウカダル暦三二一年雨の月十六日

けさ、仕事に出かけたら、たいへんなことになっていた。羊が一頭、病気にかかってたんだ。この病気は子供のときに一度だけ見たことがある。前日まで元気に見えた羊が、急に立ち上がれなくなるんだ。

ほかの羊に病気がうつる心配はないけど、この病気になった羊を食べてはいけない。とくに内臓はけっして食べてはいけない。犬やブタなどに食べさせてもいけない。この病気の羊を食べた人間や家畜は、同じ病気にかかる危険があるんだそうだ。

おやじにそう教わった。吟遊詩人の歌で、この病気について歌ったのを聞いたこともある。

病気で動けなくなった羊を焼き捨てるのはもったいないと思った羊飼いが、その羊をブタ飼いに安く売り、ブタ飼いはブタのエサにその羊の内臓を混ぜた。そのブタの肉と血と腸でソーセージをつくって、冬のあいだ食べていたら、体が動かさなくなり、ものも考えられなくなって、死んでしまった……という内容の歌だ。

飼育場の人たちはこの病気のことを知らないみたいだったから、知っているかぎりのことを教えた。「けっして食べてはいけない。とくに内臓は食べてはいけない」って。

それなのに……。

学校の授業が終わったあと、気になっていってみたら、貧しい人々の食事として下げ渡したっていうんだ。

「やつらは、食うものがなければ飢えて死んでしまうんだ。いつか病気になるかもしれないって、あす飢えて死ぬよりはましってのもんだろう？」

飼育場の監督はそう言ったけど、だめだ、そんなの。そりゃあ、あす飢えて死ぬよりは、ずっとあとで病気になって死ぬほうがましかもしれないけど……。病気の羊を食べたからといって、かならず病気になるとはかぎらないけど……。

でも、食うものに不自由しているからといって、あす飢えて死ぬとはかぎらないじゃないか。飢えている人たちだからといって、病気になるかもしれないようなものを食べさせてもいいなんて、そんなことはないはずだ。

以前に出会った子供たち。怒らせてしまったけど、彼らはおれの歌を聞いてくれた。あの子供たちが病気の羊を知らずに食べて、死ぬかもしれないなんて……。とても見過ごしになんてできない。

これは偽善かもしれない。病気の羊を取り上げたからといって、かわりに安全な食べ物を提供してやれるわけではない。それに、彼らはふだん野生のムグとか残飯なんかも食べている。それなのに、病気の羊だけ食べさせるのをやめたって、あまり意味がないかもしれない。じつのところ、おれが、彼らを見殺しにすることに耐えられないってだけかもしれない。

それでも、おれは、放っておけなくて、貧しい人々にスープを配っている場所を探した。

たぶん、彼らの居住区だろうと思って急いだら、広場と彼らの居住区の境界あたりで、偶然にもあのレイヴって少年を見かけた。

彼を見たたん、おれは来てよかったと思った。ああいうはっこい子供なら、飢えて死んだりはしない。おれのサイフをすったぐらいだからな。あのときは困ったし、盗みは悪いことだけど、飢えて死ぬよりはましだろう。いや、盗みをしなくたって、才覚のある子供なら、仕事を見つけることだってできるかもしれないじゃないか。

いまは食うに困っていても、なんとかやっていけるやつはやっていける。生きていれば道は開けるかもしれない。子供たちには未来があると思う。とくにこの少年のように生きのびる才覚がありそうなやつなら。

おれの姿を認めたら、レイヴは向こうに行きかけたが、必死に呼び止めたら立ち止まってくれた。ただごとじゃないと気づいたのだろう。

「スープを配ってる場所を知らないか？ 病気の羊なんだ！ 食べちゃだめだ！ きみはまだ食べてないだろうね？」

「おれはそういうものは食わない」

レイヴは面食らったようだったが、すぐに事態を飲み込んでくれた。カンのいい子供だ。

「でも、そろそろ配る時間だと思う。場所はこっちだ」

先に立って走っていくので、ついていいたら、ちょうどスープを配っているところに出た。行列ができ、数人がすでにスープの入った椀を手にしている。

「病気の羊をもらってきたらどう？」と、おれは配る係の者たちに向かって叫んだ。

「危険な病気なんだ！ 人に食べさせちゃだめだ」

レイヴも「食うな！」と叫んで、今にも食べようとしていた子供の椀を叩き落とし、子供が泣きだした。こぼれたスープには、肉切れのほか、内臓も入っている。やっぱり内臓まで使ったんだ。

係の男たちにつかみかかって、「やめろ！」とわめいたら、なぐり倒された。

「病気の羊がどうした！ そんなのはいつものことだ！ こっちは毎日こいつらの食いもんを調達するのに、どれだけ苦労してると思ってるんだ！」

「きょうは羊が丸一匹手に入ったんで、たっぷり肉や内臓が入っている。それをふいにして、いつもの肉がちょっぴりのスープのほうがいいかどうか、そいつらに聞いてみるよ」

男たちにつられて行列のほうを見ると、並んでいる人々はとまどっている。

「若いの」と、行列の中から声が上がった。

「そいつを食ったら、すぐに病気になるのか？ 確実に死ぬのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど。でも、将来……」

「わしらには将来なんぞない。老い先短いし、長生きなどしてもしかたがないし、だいいち、ほどこされるものを食わねば飢えて死ぬだけだ」

「じゃあ、子供たちは？ 今は飢えていても、生きる道が開けるかもしれないだろ？」

「そういやそうだ。子供だけはさう」

別の男が叫んだ。その声には、子供のことを心配しているというより、分け前がふえることを喜ぶような、ずるそうな響きがある。

その響きを察したのだろうか。「いやだ！」という子供の声が上がった。

「おいらも肉が食いたい」

「ばかやろう！」とレイヴがどなった。

「病気になるような肉を食うぐらいなら、市場でまともなのをかつぱらえ」

「なんてこと言うんだ」と、配給係がレイヴになぐりかかり、レイヴはそれをすばやくよけた。

逆上した配給係は、腹立ちまぎれに、地べたに転がったままのおれをなぐったり、蹴飛ばしたりした。別の配給係も加勢に加わって、反撃できないまま、やられっ放しで気を失ってしまった。なぐられているあいだに、「このガキ！」「もう放っとけ」という声と、おれのほかにもだれかがなぐられているような音がした。

気がついたら、さっきのところから離れた木陰に寝かされていて、なぐられたところに水で湿らせたぼろ布が当てられていた。

「気がついたかい？」と、年配の女性が顔をのぞきこんだ。以前にここにきたときに話をした人のような気がするが、自信はない。

配給係たちはすでにスープを配り終わって帰っている。十人ほどの人がおれのまわりに集まって顔をのぞきこんでいたが、レイヴの姿は見当らない。

「レイヴって子は？」

「あんたを助けようとしてだいぶんなぐられたけど、先に気がついていっちゃったよ」

そうか、あいつ、助けようとしてくれたのか？

「あの肉、みなさん、食べたんですか？」

「あたしたちは食べたよ」と、先ほどの女性が言った。

「年寄りたちはおおかた食べた。病気になったなら、なったでいい。こんな暮らしで、べつに長生きしたいとも思わないからね」

聞いているうちに、悲しくなって涙が出てきた。

「同情はよしとくれ。この年まで生きられただけ、まだ、あたしらはましなほうなんだから。ここで生まれ育った子供たちにも、あたしらぐらいの年まで生きていてほしいと思うよ。あたしらよりましな暮らしができるかどうかわからないけど」

「そうそう」と、別の年寄りもうなずいた。

「だから、感謝してるよ、知らせにきてくれて。子供や若い者には、食べなかった者もだいぶんいたしね」

つまり、食べた者もだいぶんいたってことだよな。危ないとわかっていて食べたってのが悲しいし、悔しい。食べるのをやめた人が何人かいたってのだけがまだしもの救いだ。いや、ほんとうに救いといえるのかどうか。食べるのをやめた人たちは、きょう、すきっ腹をかかえて過ごさなければならないのだから。

ハウカダル暦三二一年雨の月十七日

けさ、仕事場にいったら、クビだと言われた。きのう、広場の端っこでレイヴに「病気の羊」とか叫んでたのが、一般の人々の耳にも入って、ちょっとした騒ぎになったらしい。病気の羊を一般に売ったと思った人が何人かいたみたいだ。

「慈善用にまわしただけで、一般には売っていないって、何人に説明したと思ってやがるんだ！  
好待遇で使ってやってたのに、うちの信用をつぶしやがって」

監督はそう言って怒ってたけど、そもそも病気の羊を人に食べさせようってほうが、信用をなくす行為だよな。いくらタダ同然の安値で払い下げたっていても。抗議にきた人たちは、慈善用と聞いて納得したんだろうか？

まあ、ともかく、クビっていわれりゃ、ほかにどうしようもない。未払いの給料も払ってもらえなかった。信用をなくした賠償だとかいわれて。

悔しいなあ。かわりの仕事を見つけなきゃ。

ハウカダル暦三二一年先見の月三日

いきなり王様に呼び出された。わけがわからなくて、行ってみたら、どうもあの飼育場の監督と慈善スープの配給係に訴えられたらしい。

罪人にされてしまうなんて思ってもいなかったの、すくみあがってしまった。ホープの父親、あの貧しい村で領主に逆らって処刑されたっていう伯父のことが思い浮かぶ。まさかあれで処刑されるなんてことはないだろうとは思ってたけど。

でも、王様からの呼び出しというところが怖い。シグトゥーナのいざこざは、この町の行政官が裁判をおこなうことになっているはずだ。わけがわからなくてびびってしまった。

王様は、監督と配給係の申し立てを聞いたあと、おれをしかるべく取り調べるといって、彼らをさがらせた。

王様は、グンナルって名前で、おれの村の領主さまの甥にあたられる。まだ二十二歳のはずだけど、やっぱり王様だからなのかな？ 威厳のある人だ。

「おまえのいう病気について説明せよ」

命じられて、知っているかぎりのことを話した。とはいっても、実際に見たのは一回きりだから、知っていることなんて限られているんだけど。

「ほう、歌が残っているのか。それは聞いたことがない。吟遊詩人をめざしているのだったな。それなら歌ってみよ」

この命令には驚いた。王様の前で歌を披露するってのは、吟遊詩人にとってかなりの名誉のはず。それをまだ学生のおれが命じられるとは思ってもいなかった。

でも、だれも驚いているようには見えなかった。ほんとうに驚いていなかったのか、表に現さなかっただけかはわからないけど。

宴席などで歌うのとは事情が違って、王様はおれの歌を聴きたいんじゃなく、羊の病気についての歌を知りたいんだから、おれがまだ学生ってのは問題じゃないのかもしれない。

ともかく、豎琴を渡されたので、羊のこの病気について、知っているかぎりの歌を歌った。とはいっても三曲だけだけど。

「ふむ。伝染病のように広がりはしないし、すぐに発病するとはかぎらないが、ひとたび発病すればかならず死に至るのだな」

「はい」

「なれば、止めようとしたのは正しい。貧しい者たちにスープとパンを与えることにしたのは、病気で死なせるためではない」

驚いたことに、王様は、病気の家畜は慈善用にも使わないよう配給係に言い聞かせると約束してくれた。しかも、侍従に命じていくばくかの金が入った袋をくれたうえ、失った仕事かわりに、王宮の羊の飼育場で毎朝仕事をさせてもらえることになった。

前の職場よりほんの少し遠いけど、働く時間は以前と同じで、給料は二倍だ。

今の王様は若い希代の名君主だという噂を聞いたことがあったけど、ほんとうだったんだな

。

先代の王様が亡くなったとき、その王弟殿下たち、つまりグナル王様の叔父君たちが、まだ少年だったグナル様の即位を認めず、自分たちが王位につこうとなさった。でもうちの村の領主さまは、甥であるグナル様の味方をしたとも聞いた。それもわかるような気がする。今の王様は、きっと少年のころから、りっぱな王様になれそうな人だったんだろう。

## 吟遊詩人の日記 2

<http://p.booklog.jp/book/102642>

著者 : other-world (立川みどり@アザー・ワールド)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/other-world/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102642>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102642>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ